
はじめまして、元気です

hascap

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじめまして、元気です

【Nコード】

N7739G

【作者名】

h a s c a p

【あらすじ】

偶然の早起きが三文の徳とは限らないわけで。

「はじめまして、元気です」
流れるような金色の髪の毛の彼女は、裕二のベッドの上で、ちょこんと座ってこう言った。

「はじめまして、元気です」
彼女がやってきたのは今朝方、晴れた火曜日の朝だった。

開校記念日で今日は学校が休みなのに、裕二は早々と一人で目覚めた。いつもは父にいくら揺り動かされても、決してすぐには起きなかつたが、日曜日だけは違っていた。

今日はどうやら身体の方が、日曜日と勘違いしたらしい。

なぜなら日曜日には毎週楽しみにしているテレビがあった。
7時半からの『サクレンジャー』。8時からは『鉄面皮ライダー』。
8時半から9時の間はちよつとお休み。この時間は女の子向けのアニメだった。9時からはまだテレビをつけて『ダダダのオニ太郎』を見ていた。

しかし今日は何もなかつた。世間は忙しいただの平日の朝だった。この時間なら、せいぜいつまらないニュース番組でもやっているだろうと考えた。

それにしても随分と早く起きちゃったな、と裕二は部屋のカーテンから漏れる、青白い朝日を見てつぶやいた。

今朝は妙に冴えていた。普段の日曜日の早起きよりも、眼も頭も冴えていた。不思議と気分が軽かつた。それは起きたばかりでも部屋を一目で見渡せるくらいに。

ベッドの上から見る自分の部屋。薄茶色の勉強机に、不勉強な乱雑さで投げられたランドセル。飛び出したジャポニカ学習帳。昨日買

ったコンビニ弁当。その横で開いた教科書からは、パラパラ漫画が動き出す。

昨日は棒線のできた主人公が、ホイグリンカモメみたいに空を飛び、巨大八虫類と対決する直前、佐々木先生に見つかった。先生はじつと僕の眼を見て、そして現代国語の端に描かれた冒険を見た。巨大八虫類も、佐々木先生の前ではあまりに小さかった。先生はその肥満な身体を想像通りの緩慢な動きで、のっそりと動かし腕を上げ廊下を指差した。裕二は何も弁解の余地も与えられずに廊下へ出た。

することもなく、裕二はじつと廊下の窓から、近くの道路工事を眺めつつ、そうだ八虫類の名前を佐々木にしてやれと考えた。主人公が佐々木をあらん限りの力で殴り倒し、向かうその先には綺麗な金髪美女のお姫様がきつといるのだ。

外からはまだ、通勤電車の喧騒も聞こえてはこなかった。ゴミを荒らすカラスの鳴き声が、少しばかり聞こえてきた。

さて、とベッドから立ち上がり、一階のトイレへと向かった。

裕二のいる二階にはトイレがなかった。

階段を下り、玄関を背にして回れ右。廊下を直進、曲がれ右。リビングを通過して突き当たりがトイレだった。そのため突然の尿意や吐き気に襲われたら大変だろうな、というも思っていた。

父も寝るときは二階へ上がった。裕二の部屋の向かいがそこだ。前は書斎だと言っていたが、最近はそので寝ていた。母が居たときは母と二人、一階の部屋で寝ていたが、いまはその部屋は倉庫同然に散らかっていた。父が以前に通勤で使っていたロードバイクやら、使いもしないゴルフクラブやらが、雑多に置かれて眠っていた。

今日もまた父は書斎で寝ているだろうと疑わなかった。そのため裕二は、リビングで青白い朝日を浴びてソファに座る父を見たとき、とんでもなく驚いた。一瞬尿意が消え去った。そんな裕二の驚きに、

父は静かに振り返った。

「おはよう、裕二」

「お、おはよう」

ただの朝の挨拶に、こんなにごまぎしたことがあつたらうか。驚いたのは父が意外にもそこに居ただけではなかった。

驚いたのは顔だった。父の顔に驚いた。皺だらけの父の顔は、疲労の蓄積そのものだった。一重の両目は二重になって、おでこは耕した畑のようだった。皺という皺が「おはよう」の口の動きに合わせて波打って動き、こんなにもその存在を主張して父の顔に立ち現れるとは。窓を背にして座っていた父は青い朝日を背負っていた。その青白さが肌を照らして、一層父をくたびれて見せた。眼をこすりながら、裕二はトイレに行くことを忘れてしまった。

「どうした。ばかに早いな」

父は落ち着いていた。

「うん。なんか起きちゃった」

裕二はその場に立ち尽くしてしまった。目の前の初老の男がよもや父であるとするならば、それは恐怖であり羞恥であった。昨日の晩に裕二の気付かなかった父の老いが、たった五時間ほどでこんなに加速するとは。父は昨日の晩御飯の時のままの紺のポロシャツにカーキ色のチノパンツで服装に変わりはなかった。しかし中身は力無くしおれていた。

「裕二、ちよつといいか」

「なに？」

裕二はどきりとしてうまく言葉が出ずにうわずった。

「裕二に紹介したい人がいるんだ」

「え、誰」

「新しいお母さんだよ」

父はそういうと片手で新しいお母さんの両足を握り、リビングのテーブルの上にとすと置いた。母さんは金髪の外人女性だった。

「それなに？」

「新しいお母さんだよ」

父はさも当たり前のように言っただけだ。

「お母さんって、それ、お人形じゃない」

裕二はだんだん恐くなった。自分の予想が恐くなった。

昨日の晩御飯は皿だった。

お待たせ、と言って父が出した皿の上には何もなくて、テーブルの上には皿だけが並べられた。

父の料理は不味かった。もともと家事は全て母がやっていたから、うまいはずもなく、仕方がないと諦めていた。けれど不味い物はずいぶん不味いのだ。考えもせずに箸をとめて、裕二は正直にそう言ったことがあった。

何かが割れる音がした。きつとその日に何かが割れたのだ。裕二はそんな気がしていた。事実、父はそれからというもの、わからなくなってしまうのだ。

「はじめまして、元気です」

裕二は背筋がぞくりと凍てついた。父の無理矢理な高い声が裕二をその場で凍らせた。裕二は泣きたくなかった。

「こら裕二、お母さんに挨拶は」

「う、うん。はじめまして」

こみ上げるものを抑えようとして、裕二の声は小さくなった。

「裕二はね、ちょっと人見知りしちゃうところがあるんです。ごめんなさいね。でも根は真面目で利口ない子なんです。親ばかりだと思われるかもしれませんがね」

父はくつくつと笑いながらお母さんに話しかけた。

裕二はどうしていいのかわからなくなった。そもそもどうしてここに自分がいるのか、どうして目の前には父がいるのかわからなくなかった。逃げ出したいが凍った身体は動かなかった。

そのとき玄関からゴトリと音がした。牛乳瓶が入れられたのだ。はつとして裕二は玄関を見た。偶然にも、しかしついに裕二は顔を動かして視界から父と人形の悪夢を追いやることに成功した。

玄関には牛乳瓶が二つ、昨日もそのまた昨日も来た牛乳瓶と同じように、確かにそこには牛乳瓶が白く純潔さをもって置かれていた。

裕二はふいに安心を手に入れた。瞬間日常を取り戻したかに思えた。少し前のは悪夢であった。自分は悪夢を見ていたのだと。そう思ったらトイレに行きたくなかった。裕二は急いでトイレに駆けていった。

用を済まし、手を洗いながら鏡の前で呼吸を深く、落ち着くために深く深く呼吸をした。眼をつむり、凍てついた臓器が再び温かさを取り戻して活動を始める。あれは悪夢であったのだ。ばかげた悪夢につきあうのはまっぴらだ。

裕二は眼を開け鏡を見る。そこには自分と父がいた。

再び臓器が「ひっ」としゃっくりをして止まりかけた。

「お母さんはね、まだこの家に慣れていないんだ。裕二、案内してやりなさい」

「わかった」

裕二がそう言つと父は裕二にお母さんを手渡した。そうして父は書斎へ向かった。

その足取りはなぜだか先ほどの疲労を感じさせなかった。さわやかな朝日に似合う軽やかな足取りだった。裕二は不思議と少し楽になった。

お母さんを持つて裕二は部屋へと戻った。お母さんに我が家を案内してやる気はさらさらなかった。お母さんを適当にベッドへ放ると、弾んだ拍子に倒れず跳ねて、足を前へ投げ出し座った。座ったお母さんは動かぬ緑色の眼で前を見据えていた。

裕二はそれを見つめ返した。よく見ると随分と汚れた人形だった。どこかで父が拾って来たに違いない。早く捨ててきてしまおう、裕

二はそう思った。その時、

「はじめまして、元気です」

あの父のつくった高い声が目の前のお母さんから聞こえてきた。裕二は再びぞっとした。そんなはずはない。しかしその声は確かに聞こえた。耳の奥、頭の後ろから、確かに聞こえた。

「はじめまして、元気です」

あまりにも鮮明に聞こえるものだから、裕二はきつと眼をつむって耳をふさいだ。

「はじめまして、元気です」

それでも声は聞こえてくる。

「はじめまして、元気です」

裕二は必死に耳をふさいだ。

「はじめまして、元気です」

耳をふさぐだけでは駄目だ。裕二は大きな声を上げた。必死に大声で叫んだ。あらん限りの力を持って眼をつむり、耳をふさぎ、大声を上げた。

そうすることで、何もかもが自分の中に入ってこなかった。

声ももはや聞こえなかった。

お母さんも既に見えなかった。

音も光も何もかも。

全てが自分の中に入ってこなかった。

そのため裕二は、父が独り書斎の中で拳銃自殺したことを知ったのは、その日の夕方になってからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7739g/>

はじめまして、元気です

2010年10月28日03時14分発行